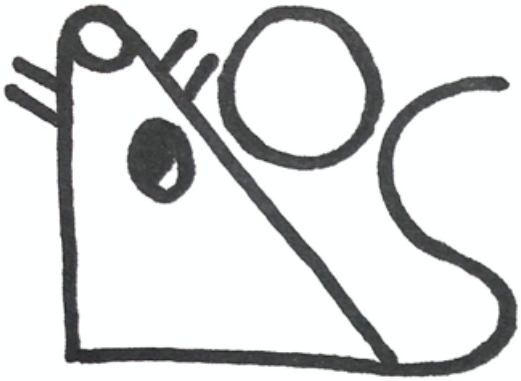
レベル 2

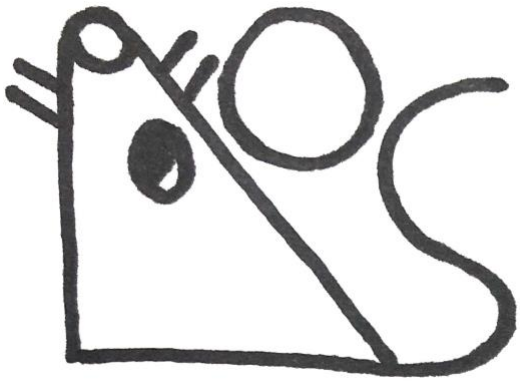
ネズミ
の
ユウシャ



文＆絵：
Cameron Sheehy / シヒ・キャメロン

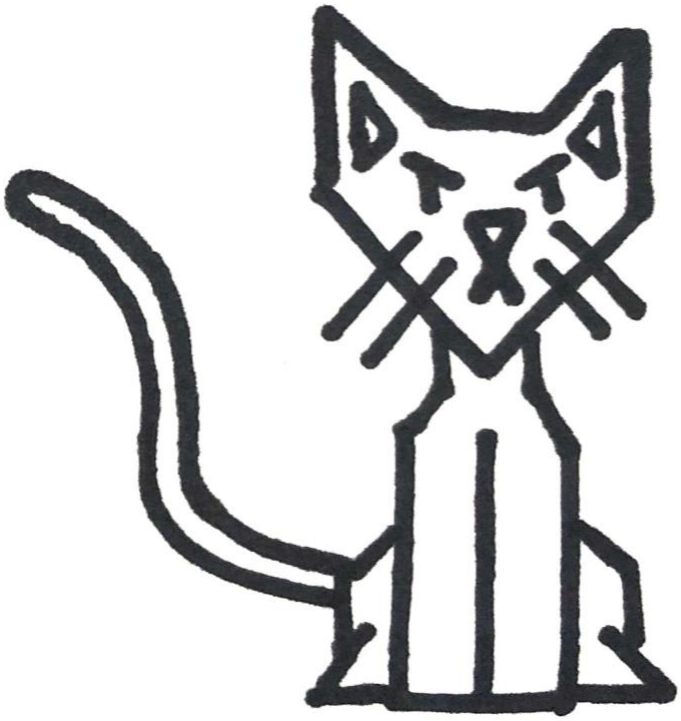
JAPN 1231 Tadoku Spring 2021

俺は、ネズミだ。
いつもペットショップに住んでいた。
とても寂しかった。
でも、今日、新しい家に連れて行かれるので、喜んでいる。
家に行ったことがないけど、ゆっくりする生活を楽しみにしている。



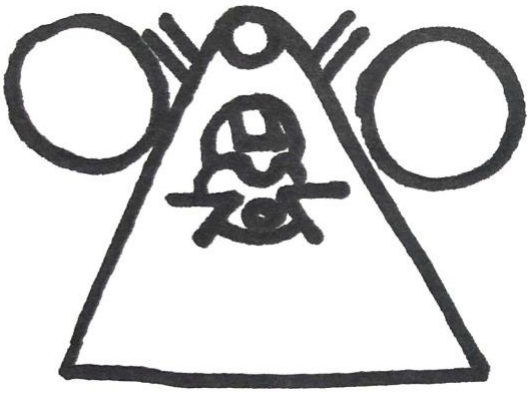
俺は、オーナーに「ユウシャ」と呼ばれている。
ユウシャというのは、「勇者」という意味だ。
今、ゆっくりする生活を楽しんでいる。
オーナーといっぱい遊んでいる。
そして、暇な時、回し車で走ったり、小さな家でよく寝たりする。
何も問題はない。

でも、新しい家に連れて来られてからある日、とても恐ろしい物を見た。
猫だったんだ！
猫を見てから小さな家に隠れた。
オーナーは猫が好きらしいが、俺は猫を信用することが出来ない。



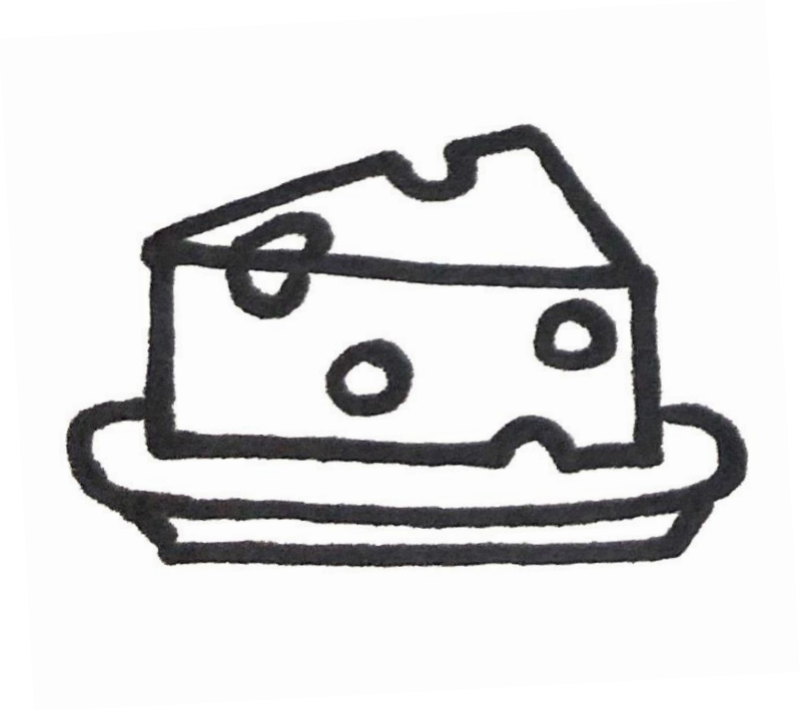
しかし、ある夜、オーナーがテーブルの上に皿を置いているのを見た。
「店からチーズの盛り合わせを持ち帰った」とオーナーは言った。
小さな黄色い立方体を拾い上げて口に入れるのを見た。
「チーズ？チーズって何？」と俺が思った。

「ユウシャにあげるよ」とオーナーは言った。
「ユウシャ？」と思った。
「それは俺じゃないか！」と言った。
オーナーがチーズを持って来てくれて、夢のような匂いがした。
それを手に取り、それを齧った。
「美味しい！！」



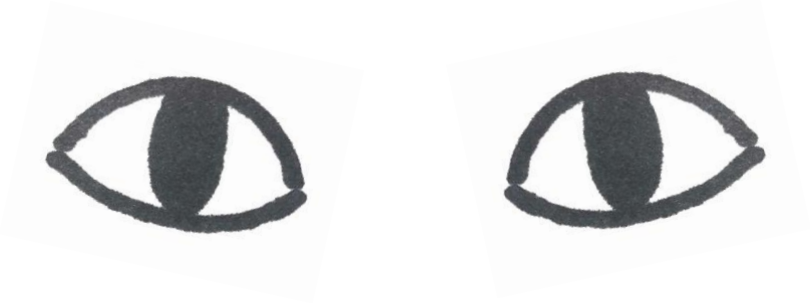
「これがあげる全てだね、ユウシャ？」とオーナーは言った。
「もういや！」と思った。
自分をコントロール出来なかった。
チーズしか考えられなかった。
「もっと食べたい！」
どうにかしなければならない。

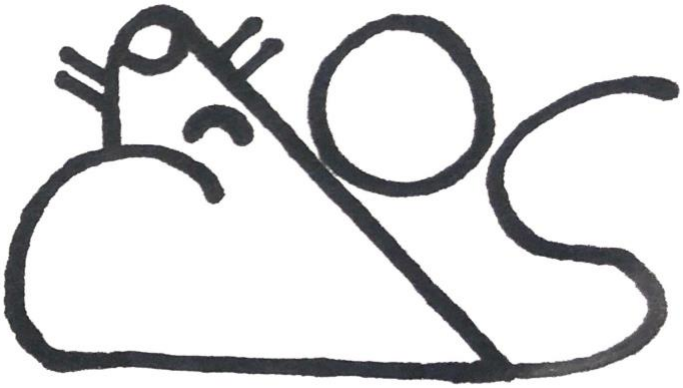
その夜、俺はケージのドアのロックを解除して、部屋をこっそり横切ってチーズをもっと手に入れられることにした。
檻から出てテーブルに登った。
次に、テーブルの脚をつたわり床に滑り込んだ。
そして、チーズが載っているテーブルまで歩いて行った。



「チーズはとても高いところにあるな」と思った。
「どうやってそこにたどり着くの？」
ジャンプしてみたが、グランドから遠く離れることが出来なかった。
すると突然、目の前に何か飛び跳ねるのが見えた。
「猫だ！」

俺はすぐに猫の視野から逃げた。
「大変だ！あの美味しいチーズをもう少し食べるまでは猫に食べられたくない。」
すると、「あのチーズを手に入れようとしているんだよね？お手伝いしよう。」
覗き見すると、猫の大きな黄色い目がチーズのように俺を見つめているのが見えた。



「しかし、なぜ手伝ってくれるの？」俺は猫に聞いた。
「まあ、君と話すために神経質になっていた。しかし、君を見る時は、君はいつも隠れていた。友達になりたいだけだ。」
俺は猫の背中に登り、簡単にテーブルに飛び乗った。

そこには、チーズの皿があり、金のように黄色で、金と同じくらい価値があった。
俺は自分の気持ちを封じ込めることが出来なかった。
動けなくなるまで、出来るだけたくさん食べた。
「友達だったんだ！誤解していた。」と猫に言った。
「じゃ、友達になろうよ」と猫が言った。